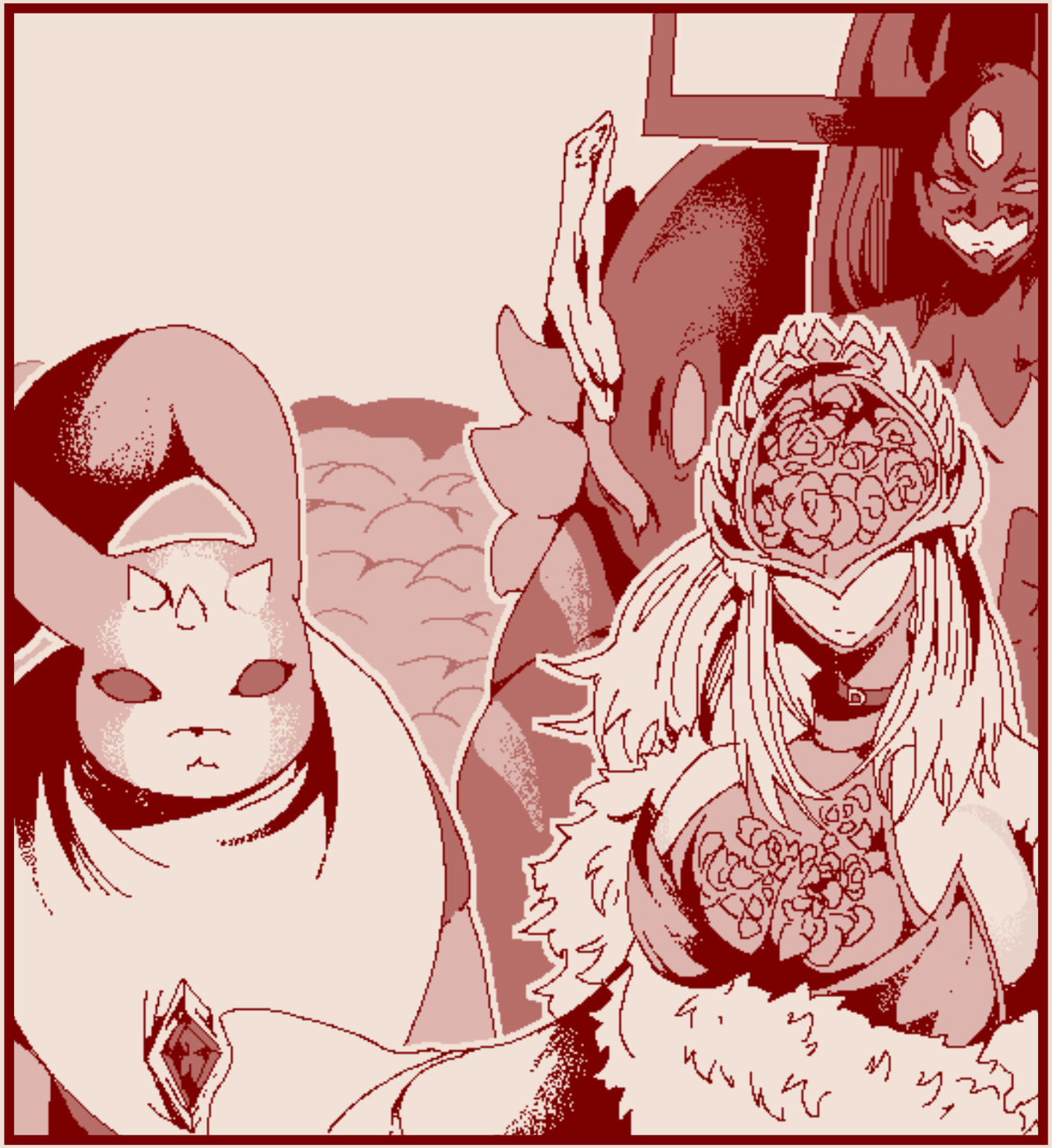
1

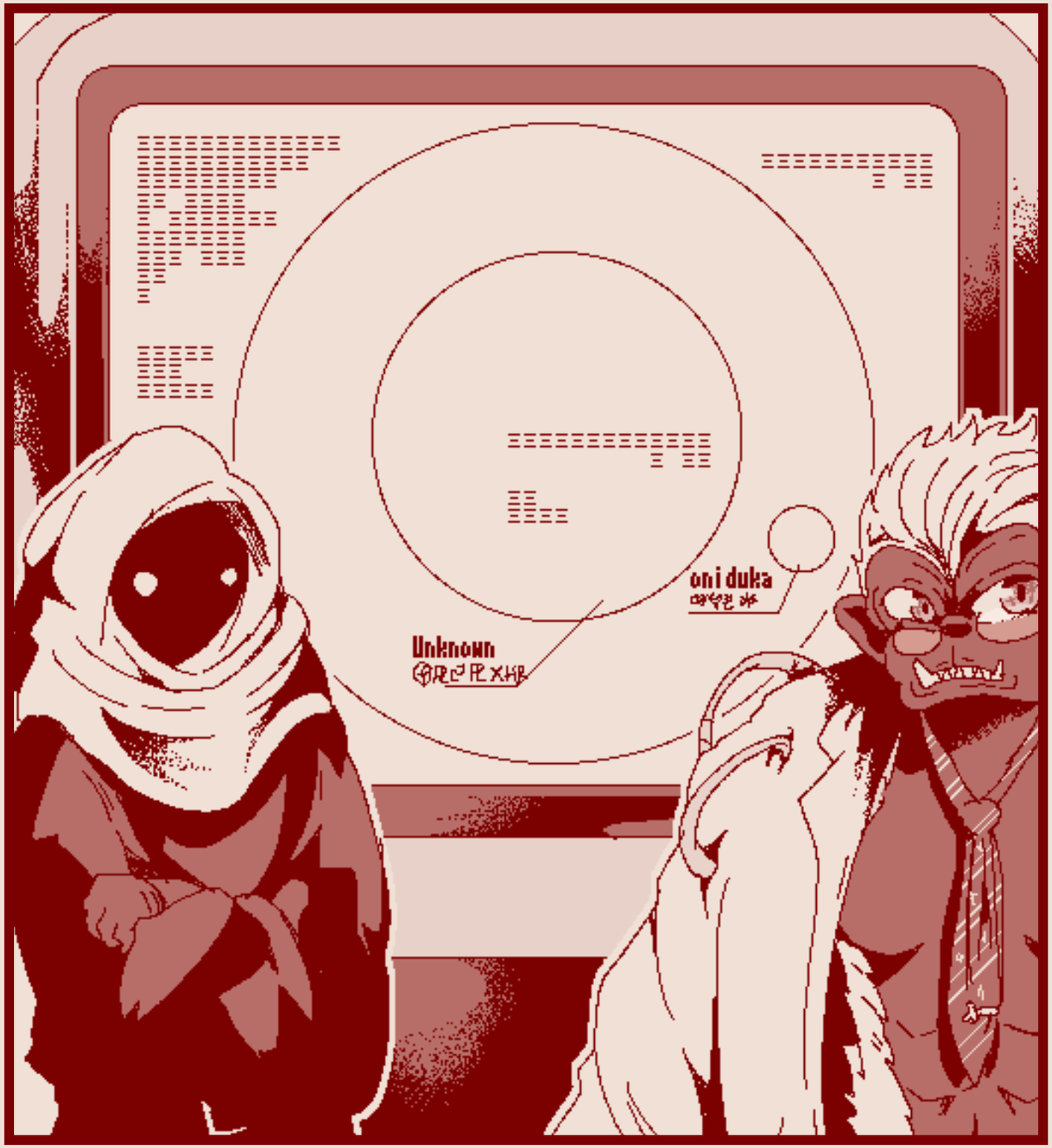
天使達が呼び出したソルメラモンは、デュナスモンの攻撃を起爆剤とし、地上の太陽を作り出した。

巨大な熱と光のエネルギーを放出するそれは、内部でソルメラモンを構成するプチメラモンが激しい爆発を繰り返していた。



2

　デュナスモンの攻撃により、後に予想された拡大範囲は、攻撃前と比べ小規模となったものの、徐々に拡大し始めている。
　状況開始から 2 時間後、主要な戦力となるデジモン及び人間達は集まり対応を協議していた。
「現在、西の工場エリアに落下したソルメラモンの半径は 5km、内部温度は 5,000 度。
　付近の建築物がガラス化しており、正に小型の太陽ですな。
　現在、規模は変動していないものの 48 時間もすれば拡大を開始すると考えられます。」
　白衣を着たゴリモンが淡々と状況を説明していく。
「周辺の避難状況は？」
「比較的熱に耐性のあるデジモンを中心に周囲 10km の避難を行っており、3時間で避難は完了すると見込まれています。」
　施設等を管理しているナノモンが報告する。
「お居住区ではない、工場エリアに落ちたのは、お不幸中の幸いですわね。」



3

「データを元に内部解析の結果、鬼塚女史の生存は分からんが、デュナスモンの姿は、確認できました。」
　ここで、ゴリモンの横にいたワイズモンが口を開いた。
「敵の目的についてだが、一仮説の域を出ないが今までの我々への攻撃とは別の目的があると私とゴリモンは考えている。」
「？…ここまで大規模な攻撃は初めてだろ？どう考えても殺傷目的に思えるが？」
　どこからともなく声が上がる。
「確かに、いずれ巨大化を続け爆発ないし、ファクトリアタウンを飲み込むか。だが、それならば早々に落下した段階で爆発すればいいのをなぜか持続的に球形となっている。」
「本来なら爆発するのをデュナスモンの攻撃により防がれ、次の手段として現在の形を取っていると考えられないのか？」
「その可能性も勿論ありますが、これを見てください。
　解析の結果ですが中心部の半径2km は、層のようになっており、内部温度は 40 度程しかない。」
「更には、内部で正体不明のエネルギー物質が確認されました。
　そこで私とワイズモンは、敵には別の目的があると考えています。」
「お敵の目的はともかく、何かしらのお方法であのソルメラモンをお倒さないといけませんわね…。」

4

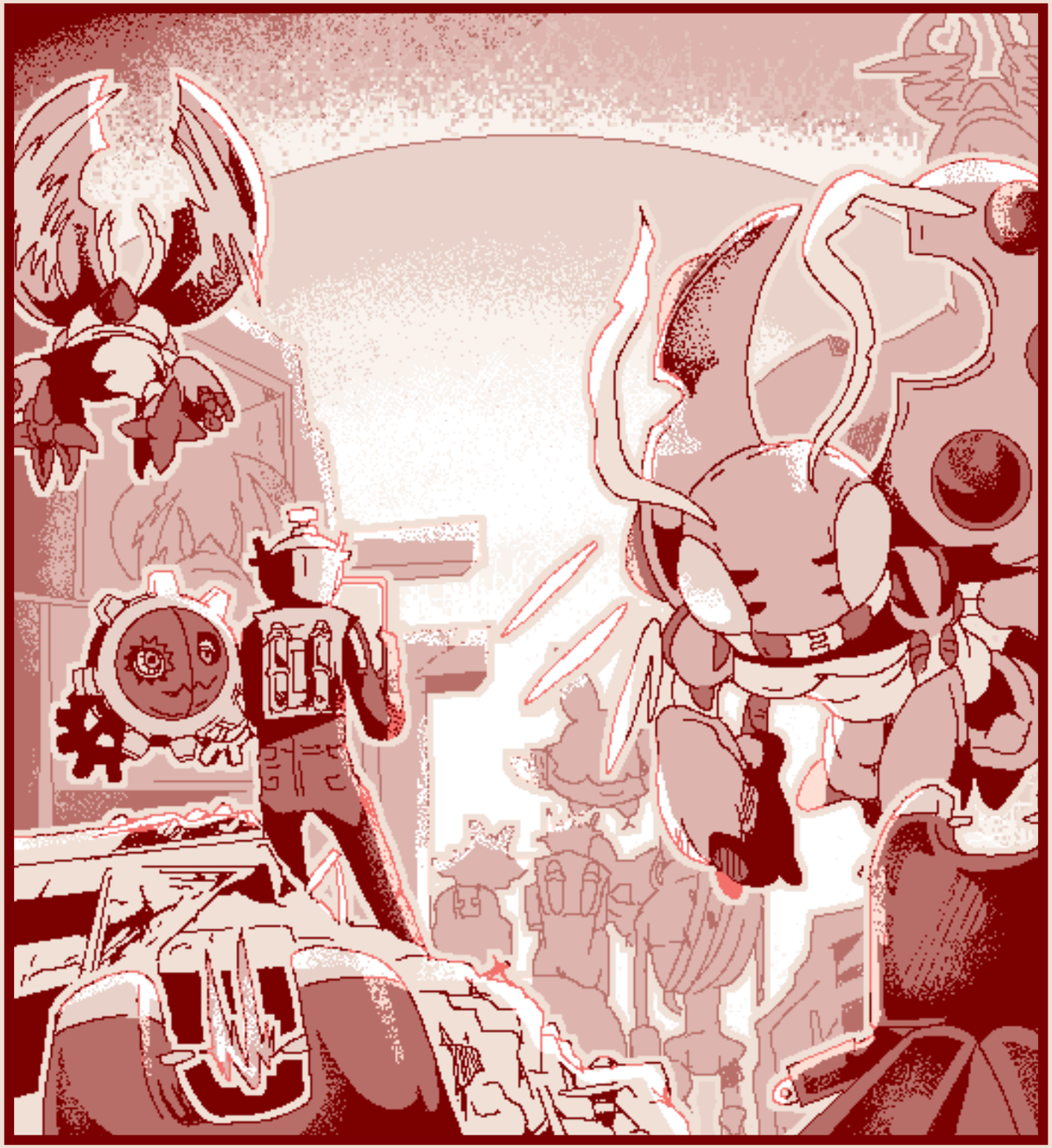
「それで…こいつら…悪魔と協力しろと？」
　口を開いたのはマリンブルモンであった。
「…当たり前だ。
　48 時間もすればアレは拡大を開始する。
　それまでに、どうにかしないといけないんだ…思想とか個人的な感情で選り好みしてる暇もないだろう。」
「その 48 時間…、ソルメラモンのデータは提供されたものと聞いたぜ…アンティラモン…いやケルビモンに天使がな。」
　マリンブルモンの言葉に周囲がどよめき始める。
「俺達を殺した奴らの情報を信じる？どう考えてもおかしいだろ？それとも同じ天使だから信用したのか？あんたも天使だから？」
（誰が…知ってるのは極少数のはず…、いや…その少数の中に不信感を持ってる者がいてもおかしくないか…？）
「…確かにデータは、アルケーエンジェモンから秘密裏にという事で提供された。
　しかし、完全に信用したのではなく、取っ掛かりとしてでしっかりと裏取りは行っている。」
「し…信用ならねえよ！そもそもその裏取りだって…！
　あんただって俺達は…！この状況自体、何か裏があるんじゃねえか!?」
　どこからともかく声が上がりそれは、どんどんと広まっていた。
「そもそも、なんで俺達がこんな目に遭わなきゃならねえんだ？
　訳も分からず戦いはじめたが、天使と話し合う場なんてなかった。
　本当は悪魔だけが狙われてるんじゃないのか？この期間だって俺達が逃げる時間とかで…それを隠してるとかじゃねえのか!?」
「とんでもない、お花畑野郎共だな。
　そんな訳あるかよ、出てったら殺されるに決まってるだろ。」
「天使達がワシらの街を襲ったのも急であった、誰かが話したならどこからか噂くらい流れるはずじゃ。」
「ダークエリアからこいつらが出てきたから天使様達は僕達諸共m攻撃したんじゃないのか？僕達はそれに巻き込まれただけで…！」
「そうだ！そもそもお前らが過去にシオンで戦争を起こしたのが原因なんだろ！」
「俺達はあのクソ天使共に殺されそうになったのを反抗しただけだ！それをまるで極悪人みてえに語りやがって！それになにか!?じゃあ、あの押し込められたダークエリアのクソみたいな環境になんの罪もないガキ共を野垂れ死にさせろってか！」
「やめろって！過去の事なんて!!」
「黙ってろ！人間共！そもそも、お前らを助ける義理だって本来は、俺らにはねえんだよ！
　知りもしないで、毎回好き勝手言いやがって!!!部外者の癖に!!!」
「ふざけんな!!勝手に連れて来られておめえら化物と一緒くたにされて!!!こっちだってやってらんねえんだよ!!!」
　どこからともかくお互いを罵倒する言葉が飛び交いはじめた。
　静止するアンティラモン達の言葉に誰も耳を傾けなかった。

5

「俺達は巻き込まれていいってのかよ!?兄弟同然に育ったシャコモンは、それに巻き込まれて天使に殺されたんだぞ!!!てめえらの過去せいでな!!!！」
「てめえ！マリンブルモン！今回の爆撃でお前を庇ったのは、イビルモンだった事、7もう忘れたのかよ!!!
　クソ…なんで…なんでお前なんかの為にあいつが死ぬ必要があったんだよ!!!！」
　遂に、悪魔型デジモンの一体にマリンブルモンが殴り掛かろうとした瞬間であった。
　その間に、重傷で寝ていた筈の宮子が割って入った。
　周囲のデジモンがマリンブルモン達を引き剥がす。
　先のソルメラモンの落下により、マリンブルモンを庇い宮子とそのパートナーであるガードロモンが死んだ。
　宮子もガードロモンが庇いなんとか生き延びたが本来なら動いてはならない重症でだった。
　後ろからいつも一緒にいるグレイモンとピコデビモンが宮子を庇う。
「っ…。」
　周囲に静寂が広がった。
「…お願いします。」
　ピコデビモンが土下座のポーズを取った。
「ごめんなさい…僕達は、皆さんまで、天使達がなんで襲ってくるのか分かりません。
　皆さんの言う通り、襲われるのは…僕達のせいかもしれません…。
　それでも…いいと思ってました。
　僕達がこんな目に遭ってるんだから、助かる為なら今度は、皆さんが死んでもいいって…。」
「…っ、」
「でも…皆んなと会って！宮子やグレイモン！他の優しいひとがいるって分かって…もうガードロモンみたいに誰かが死んで欲しくない！僕も死にたくない!!!
　ごめんなさい…ごめんなさい…。
　だから…お願いします。
　図々しいのは分かってます…でも、助けてください…！」
「私も…子供だし、馬鹿だし…マリンブルモン達の…DW の過去がどんななのか分からない…でも、また…お母さんやお父さん…お兄ちゃんに会いたい！死にたくない!!!
　だから…協力して…助けて…お願いします!!」
「「お願いします…お願いします…。」」
　グレイモンも静かに頭を下げ、懇願した。
　一瞬マリンブルモンの脳内で宮子達がシャコモンと重なった。
　マリンブルモンは、その光景に何かが力と一緒に落ちるように感じた。
　残ったのは、ただ虚しさだけであった。
　それは、周囲も同じであった、熱が引いていくのを…残ったのは虚しさだけだあった。
　マリンブルモンは、何もいわず項垂れて外に出て行った。
　結局、状況が混乱したのもあり再び次の日に持ち越しとなった。

6

　次の日の早朝、宮子をマリンブルモンが尋ねた。
「マリンブルモン…。」
「宮子…昨日は吹き飛ばして悪かった。」
「うん…。」
「それに、ピコデビモン。」
　マリンブルモンが宮子の後ろにいるピコデビモンを見た。
「すまなかった…。
　昨日…いや、今まで酷い事言っちまって。」
「…。」
「分かったてだんだ…おめえらに会って、今まで聞いていた悪魔なんていなかったんだって。
　ただ…じゃあ、大事な弟はなんで死んだんだ…その憎しみを…誰かにぶつけたかっただけだって。
　そうしなきゃ憎しみに押し潰される気がしたんだ。
　でも、昨日のお前達を見て…少しだけ憎しみを忘れて…憎しみが消えれば、ただ虚しさだけがあった…弟も守れないで、守らなきゃならねえ俺達がガキみたいに騒いで…弟と同じくらいの奴らに頭下げさせて…俺は何やってんだろうなって。
　…上手く言えねえけど俺は憎しみ以上にそれが耐えられねえ…だから…。」
「うん…ありがとう…。」
　他のものもそうであったのか、ただ熱が去っただけかは分からないが、皆遺恨を飲み込み生き残るため、目の前の困難に立ち向かう意思を示した。



7

まず、行われたのは、提供されたデータを元に電磁波を感知できる電気系のデジモンによりソルメラモンの入念な観測が行われた。

ダークエリア観測用に設計されていたものを人間用に調整、設計者の趣味を盛り込んだ高・低温、BC 兵器への耐性を備え、人類の生存が困難とされる過酷環境適用スーツ、デモニカスーツにより、人間も調査に参加する事により観測の完了を大幅に短縮する事が可能となった。

調査により判明したのは中心コアが、地中のエネルギー脈から絶えず供給を受け続けており、発光周期の中にごく短い出力の落ち込みの瞬間、数秒だけの“谷”がある事が分かった。

その谷は、急激な膨張を開始する直前のチャージ時に、最大の落ち込みをする事が発見された。

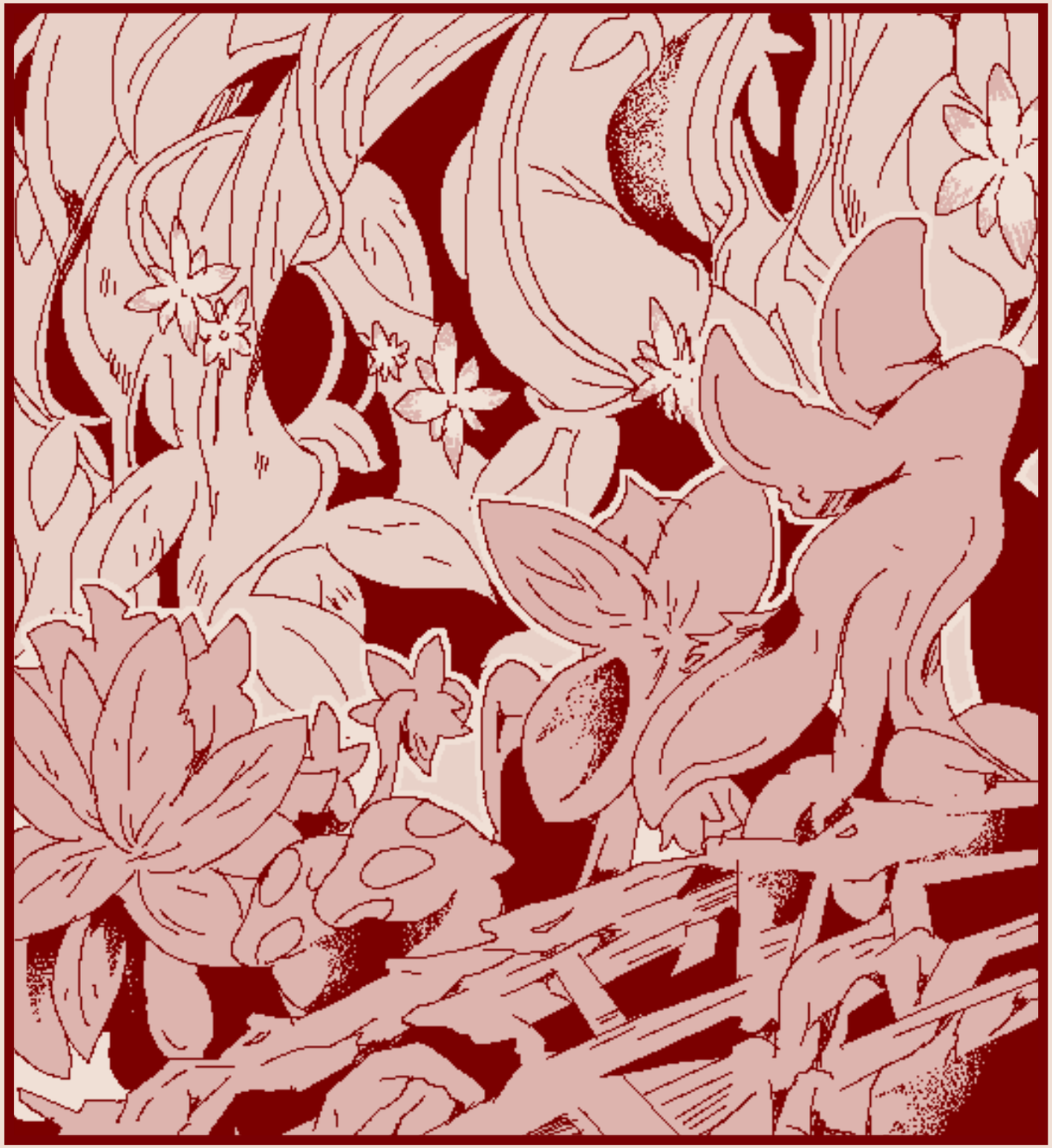
「ソルメラモンが膨張を開始し、爆発をすれば今から脱出を試みても助からないだろう。

確かに、危険な賭けになる！勝利の確率は万に１つだ！

しかし、勝利の鍵は、残されている！

我々に、残された道は勝利しかない！志しも出自も違う者達であるが、守りたいものは同じ！必ずその勝利を勝ち取るのだ！」

アンティラモンの号令と共に作戦が開始された。

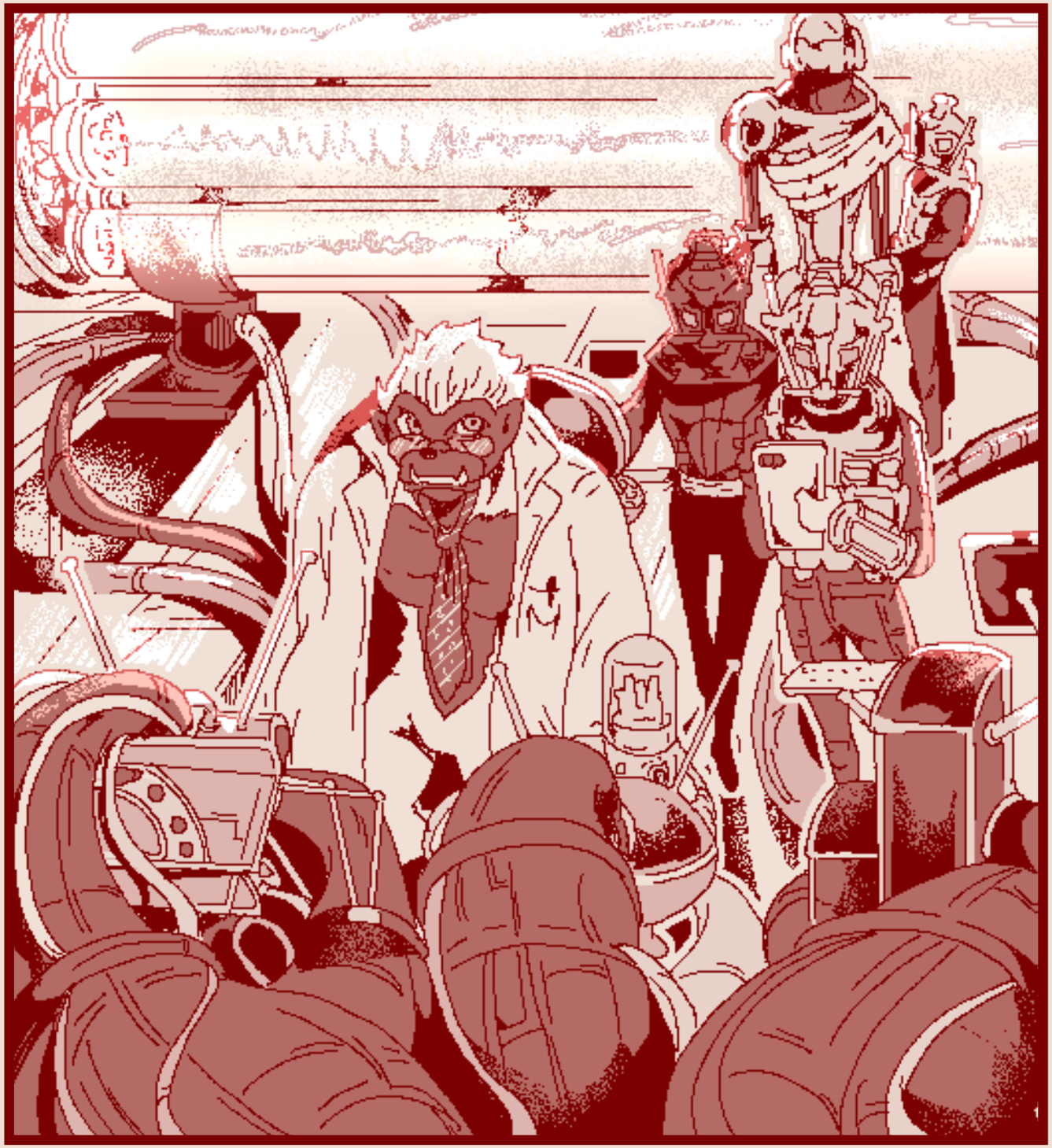


8

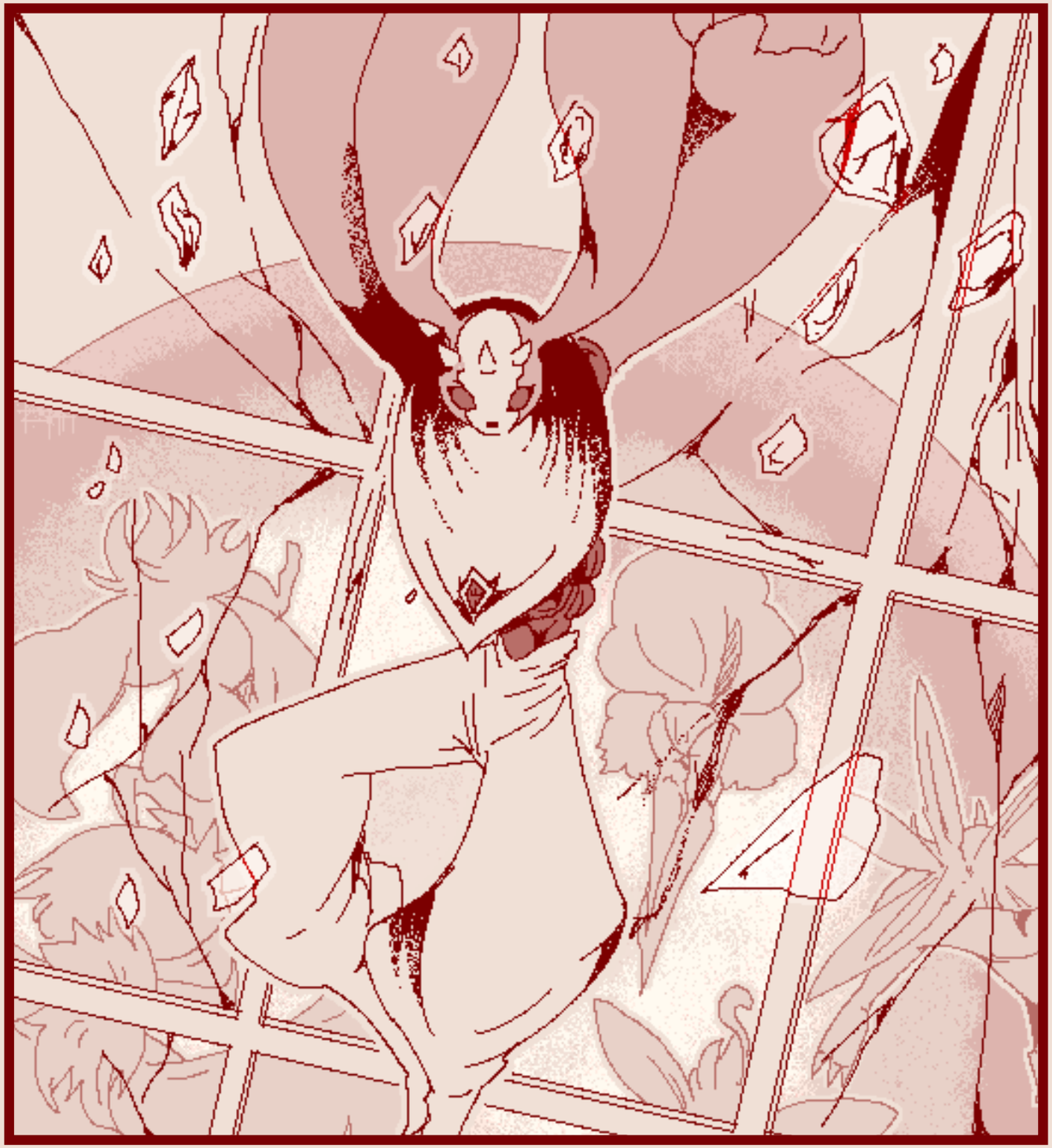
「まずは、お外殻をお破壊しますわ!!」
　電気タイプのデジモンにより帯電粒子の散布により磁気のリコネクションを行い、磁場の拡散が行われた。
　磁場の乱れにより、数時間でソルメラモンに黒点の出現が確認された。
「ソルメラモンの内部は無数のプチメラモンの爆発によって成り立っているが、それはランダムに爆発しているのではない。
　その実、核が均一な加熱を行うように、演算、調整がされている。
　磁場の拡散により、加熱の偏りが全体の不安定さに繋がるという訳だ。」
　次に行われたのは、植物型デジモンの地中コードの書き換えであった。
　ソルメラモンの地中のコードを分解し、エネルギーの変える過程に複雑な植物デジモンが作る森で地中のコードをコーティングし、分解の速度の低下、温度の低下が行われた。

コーティングにより温度の低下を氷雪タイプのデジモンが雲を発生させソルメラモンの表面温度を更に下げていく。

数時間後、ソルメラモンの表面温度分布が乱れるのが観測された。



「賭けでしたが、モデムの耐熱温度まで下げる事に成功しましたね…。」
　観測データからソルメラモンの脈動周期・再生周期・防御展開周期を計算。
　モデムを通じ演算ルーチンに対し、矛盾した情報命令を打ち込まれる。
「我々、デジモンは目の前の現象を現実としか捉えられない。
　データとしてデジモンを捉え、情報のパンクを狙う…マテリアルワールド（物質世界）の住人である人間ならではなの視点ですね。」
「DW では、タブレットの充電が必要なく、文字…コードが大きな影響を持つ、我々人間に取っては魔法も当然に思っていましたからね。」



11

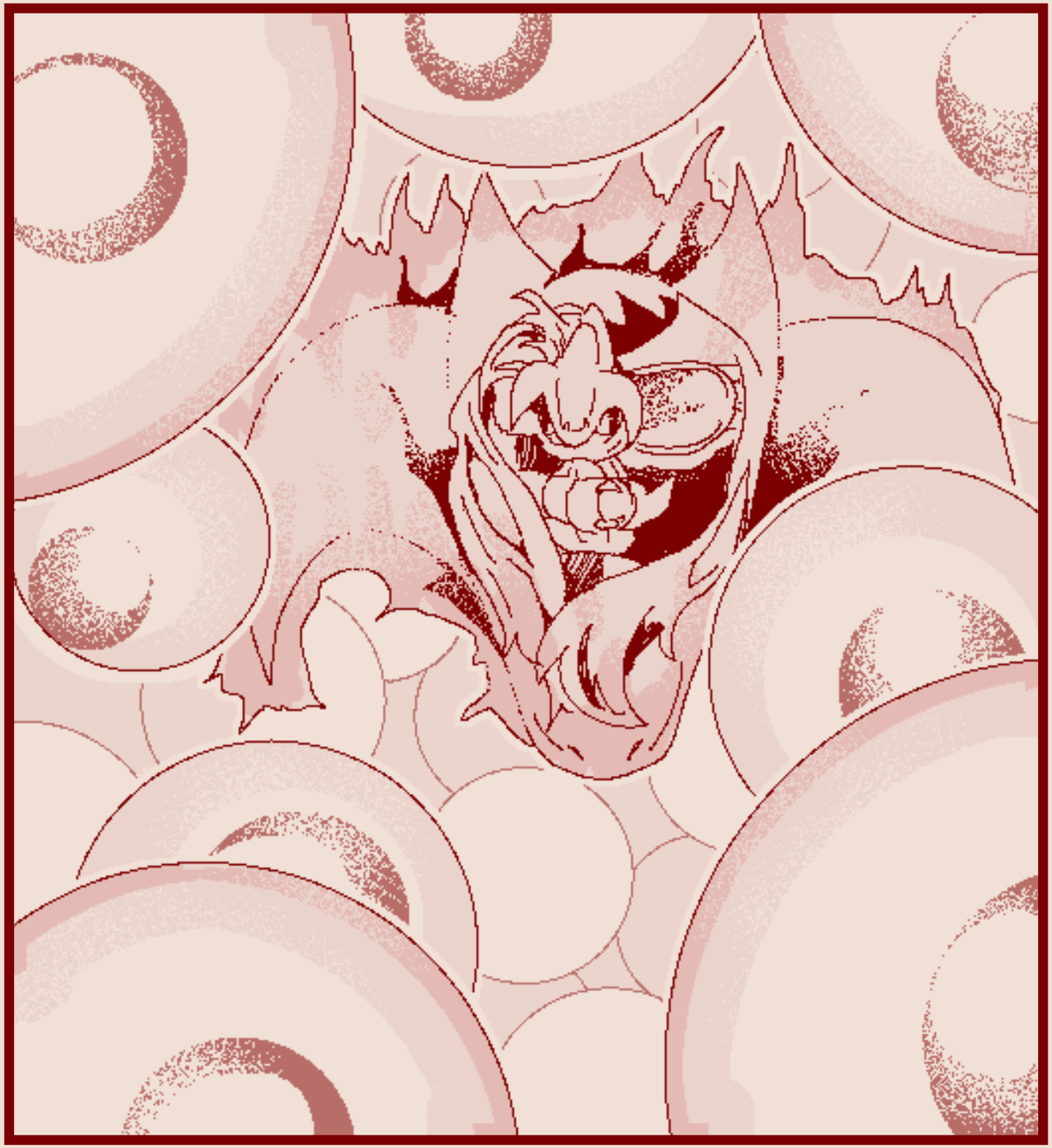
「なんとか間に合ったな…。」
　ソルメラモンの膨張が開始する数分前、遂にコアへを届くサイズへとなった。
「アレの用意は？」
「一応、してありますが…しかしデュナスモン達は。」
「お安心なさい、あのお馬鹿ちん達は死んだりしませんわ。」
　ソルメラモンの目の前のビルに主戦力となるデジモンが一斉に集められた。
「すまない…多くの子供達も死んで辛い時に…駆り出してしまい。」
　サンドリモンにアンティラモンが語り掛ける。
「…尚の事ですわ。
　ママとして、あの子達の最期に大人としての責任を果たす…それがあの子達への手向けになりますわ。」
「…そうだな…よし!!!みんな行くぞ!!!」
　サンドリモンによるガラスのコーティングを纏ったデジモン達が、アンティラモンの声を合図に、ビルから飛び降りソルメラモンに飛びかかる。
「お最後はひとつ！シンプルにブン殴り合いですわ!!!！」

「るあああああああああああああ!!!!!!!!」
　縮小したとは言え太陽とまでなったソルメラモンのエネルギーは凄まじく、核へ一番近づく一瞬を狙い、究極体複数での攻撃も弾く程の圧力を発していた。
「帰ってこい!!!!!！光!!!!!!!!デュナスモン!!!!!！」

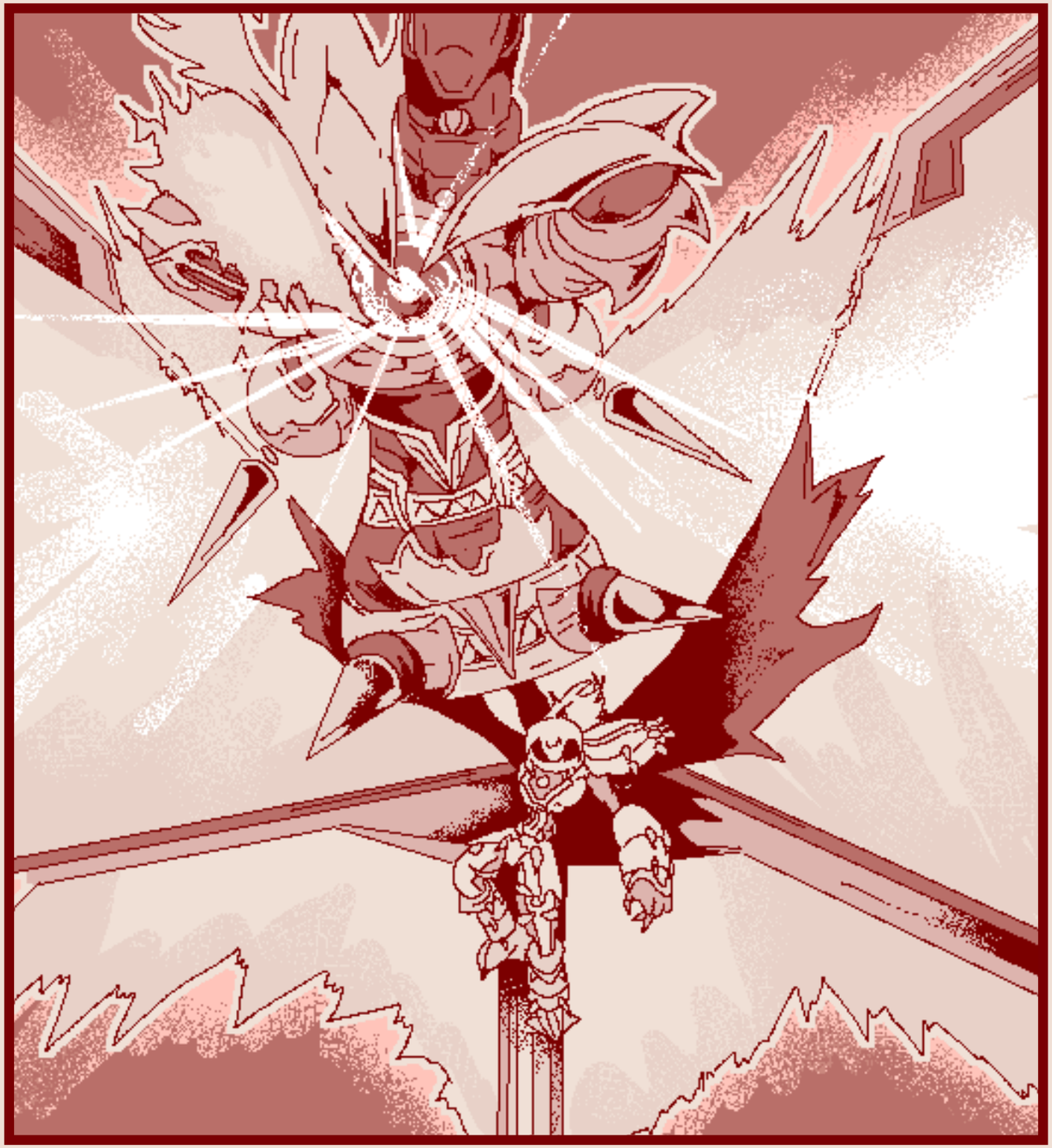
12

（ここは…？確かソルメラモンに攻撃をして…。
光は…？）
奇妙な光景であったが、デュナスモンはそれを受け入れ呆然と立っていた。
広く、なだらかな道、そこに無造作に立つ無数の卒塔婆、そしてその間を駆ける兎。
（…また、光を危険な目に遭わせたのか…私は？
逃げる道ではない…胸を張って進める険しい道を一緒に進む。
だが、本当にそうなのか？
私は、一緒に険しい道を進む事で罪悪感から逃げる心の楽な道を選んだのではないか？
目の前に広がる広くなだらかな道、そこを安易に進んでいる。
私は…本当にガルフモンであった時から…変われたのか？
光に…勇太の死に見合った者になれたのか…？）

（水中…沈んでいってる…。）
　光は、卒塔婆の埋まる水中へ沈んでいく、焦りはなくそれをただ受け入れていた。
（現実じゃないわよね…そうか、終わるのね…まぁ、それならそれでいいのかも。
パパとママには、悪い事したわね…。
　でも、出来の悪い娘にしては頑張ったよね？…ねぇ勇太？）
　卒塔婆の中から何か得体の知れないもの達が光を覗いていた。
　それに身を任せようろ光が目を瞑ろうとしたその時、勇太から託されたくれクレシェモン達のタグとゴーグルがぶつかった。
　それを見て光は我に帰った。
（…そうよね、まだ…。）
　誰かが、光の背中を押し、誰かが光の手を水面に引き上げる。
（勇太…！）

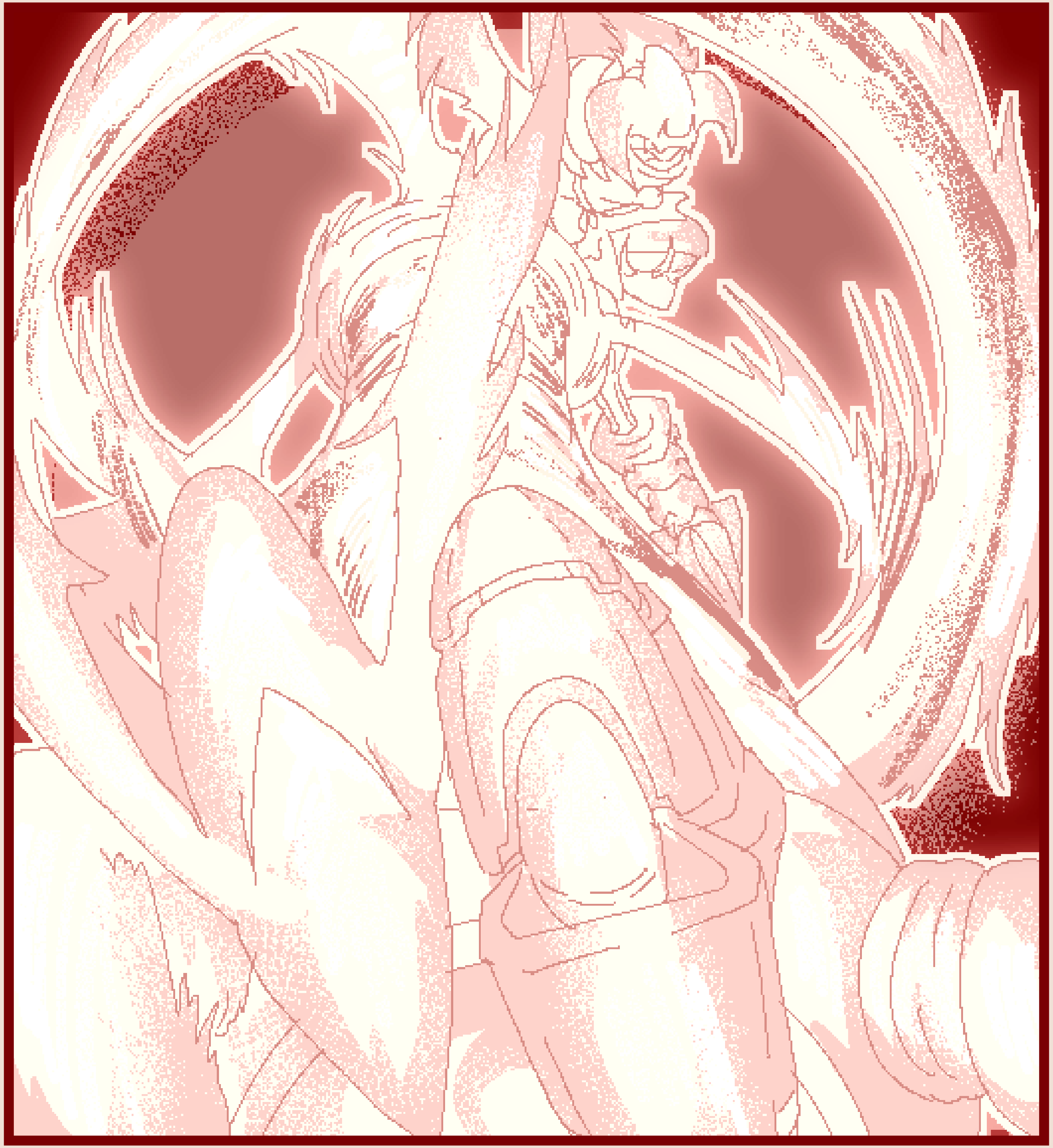


「ここは…。」
　光が目を覚ますと周囲が爆発を繰り返していた。
　それをデュナスモンが気を失いながらも全身をブレス・オブ・ワイバーンで包み守っていた。
「…ほんとに私に似てない、いい子ね。
　起きなさい！デュナスモン!!」
「ひ…かり。」
「寝起きで悪いけどなんとかここから…！」
　その瞬間、アンティラモンが爆発を突き破りデュナスモンと光を引っ張り上げた。
「良かった…！生きてるな!!」
「お心配、お掛けして…！この子達は!!!」
「状況は!?」
「悪いが!!説明をしている暇はない!!!
　デュナスモン！今から上空へ放り投げる!!後は全力でやれ！」
「は？…うおおおお!!!!???」
　アンティラモンがデュナスモンを上空へ放り投げる。



15

「私達では、結局核へお攻撃が届かなかった…お膨張が始まりますわ…！
　全てはあなた達のお最後のお攻撃に掛かってますわ!!!」
「アルマリオン・フィンガー射出しろ!!!!!」
　アンティラモンの掛け声と共に後方から巨大な手の装甲が射出される。
「なんだか知らないけど…分かったわよ!!デュナスモン!!!」
「ああ!!!光!!!クラッシャー!!!!!！コネクト!!!」
　アルマリオン・フィンガーの射出に合わせ、デュナスモンが拳を叩きこみ装着する。
　それに呼応し、アルマリオン・フィンガーが展開巨大なエネルギーの羽根を形成した。



　アルマリオン・フィンガー。
　アンティラモンがゴリモン達と共に天使達に対抗するために、メタルエンパイアの前身となったロストエンパイアの失われた技術を遺跡から捜索中に発見された別世界のデジモンであるアルマモンのデータを元に作成されたデュナスモン専用の武器である。
　Legend-Arms の力により、強制的にデジモンを武器変換する。
　その途中段階で止める事により、変換途中で粒子状となったデジモンをそのまま光として発散、破壊させる最強最期の切り札である。
　アルマリオン・フィンガーの腕部分が高速回転を行い、デュナスモンの全身が光輝くエネルギーに溢れる。
「でああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!！」
　急激に膨張を開始したソルメラモンとアルマリオン・フィンガーがぶつかる。
　その瞬間、爆発のエネルギー事、光になり天に昇っていく。
「はああああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!！」
　ソルメラモンが光の渦となり天へと完全に消えていった。
　文字通り、ソルメラモンは跡形もなく消えていた。

「はぁはぁ…。」
　アルマリオン・フィンガーは、ヒビが全体に入りバラバラとなった。
「光…！」
　アンティラモン達が光に駆け寄る。
「このお馬鹿チン！お心配しましたわよ全く!!!」
　サンドリモンが光とデュナスモンを抱きしめ絞め落とす勢いで力を籠める。

「お疲れじゃねえか。」
「グレイモン…。」
　マリンブルモンにグレイモンが近寄り声を掛ける。
「どうよ、割と悪くねえもんだろ。
　人間も悪魔も…。」
「ふん…まぁ、これから協力するのはやぶさかじゃねえと思ったくらいだよ、馴れ馴れしいな…たく。」
「けっ、可愛げのない奴だ。」
「それよりアレが…。」
　マリンブルモン、光達の目線の先にあったのはソルメラモンの中心部にあったものそれは、木に実るようになっていた。
「コンセクレイションリング。」

「おっと☆それに手を出しちゃ駄目だぞ☆」
　アンティラモン達がコンセクレイションリングに近寄ろうとした瞬間、何かが間に入るように空から降って来た。
　それは、ラブリーエンジェモンであった。
　その手には、
「アルケーエンジェモン…！」
　ラブリーエンジェモンの手に握られていたのは、アンティラモン達に情報提供をしたアルケーエンジェモンの生首であった。
「いや～ん☆私、ほんとはこんな暴力振るいたくなかったのに☆
　この生首さんの思惑通りで私が死ぬくらいなら、文句はなかったのに、オファニモン様達の計画を邪魔する結果になりそうなら、ペナルティは当然だよね☆
　いい隠れ蓑になるから、黙ってればお手柄あげたのにほんとお馬鹿さん☆」
　アルケーエンジェモンの首は断面から察せるに無理矢理引き千切られたものであった。
「コンセクレイションリングはデジモンや人間に寄生して情報を解読、吸い取って寄生先に特化したものにゆっくり形成させていくもの…、それをソルメラモンのエネルギーを使って無理矢理多様な人物に使えるよう情報演算を行わせ生成したのか…。」
「せい☆かい☆さっすがケルビモン様☆
　じゃあ、これがどんなに大事か分かるよね☆」
「ああ、私達にとって邪魔なのがな。」
「コンセクレイションリングは生成期間が長いから破壊されると作り直すのが大変なの☆
　これから、世界を導くのには数が幾らあっても足りない☆
　だからこうやって作るのが第一目標だったんだ☆あなた達のせん滅は、二の次☆
　だから、見逃してあげなくもないけど向かってくるなら☆」
　ラブリーエンジェモンの声が低く重いものに変わる。

「ギルティ…デスペナルティ、エクスキューション。」

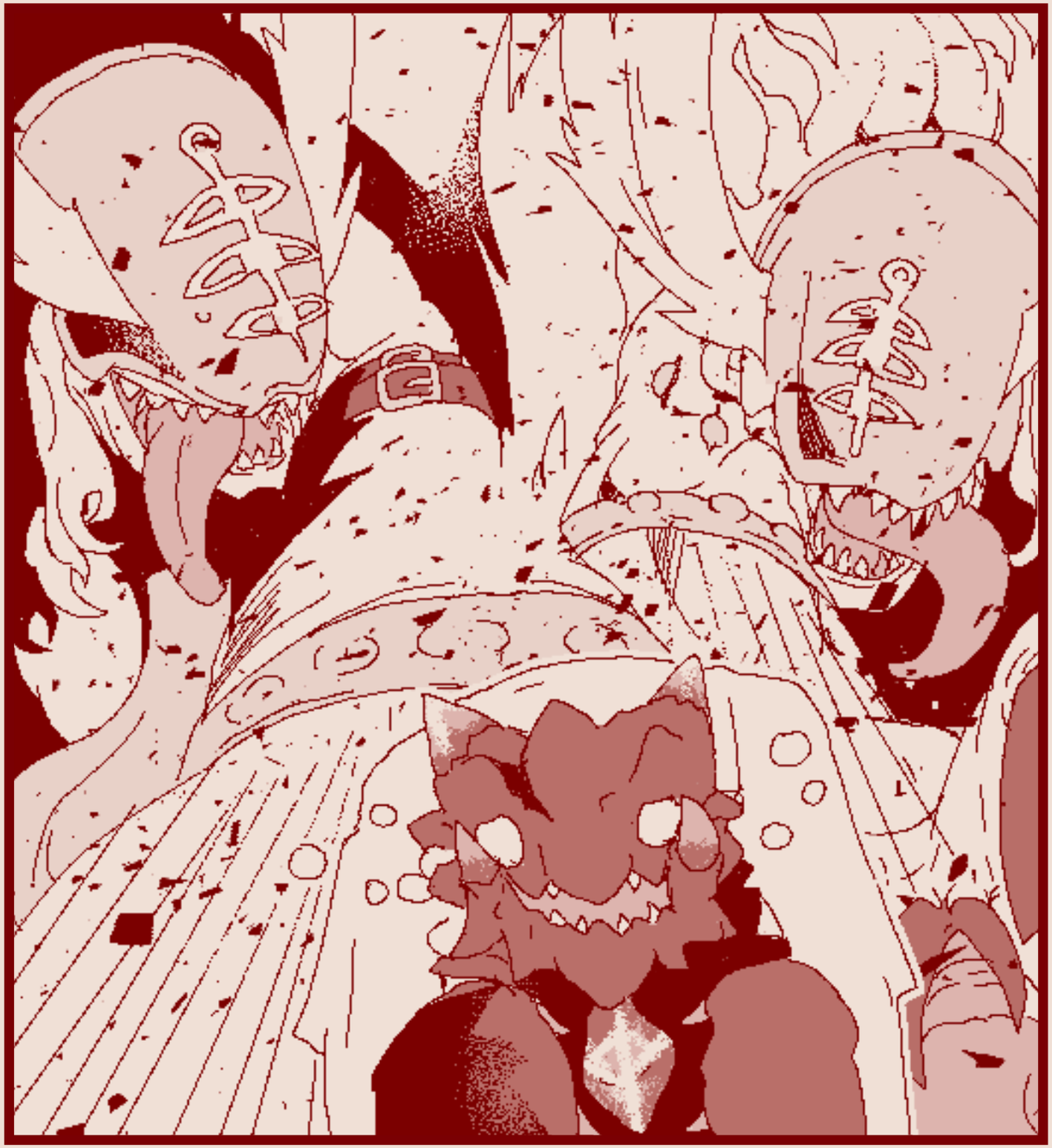
18

　瞬間、周囲にいた全デジモンがラブリーエンジェモンに飛びかかる。
　それをラブリーエンジェモンは躱し、瞬間各個吹き飛ばす。
　残ったデュナスモンとサンドリモンとアンティラモンが囲み格闘に入るが、ラブリーエンジェモンへの攻撃は全て防がれ、ラブリーエンジェモンからの攻撃は的確に急所を抉ってきた。
（なんだ…！こいつ!?体術!?今までのどのデジモンよりも…デーモンよりも…!?）
　デュナスモン達は吹き飛ばされ、光はデュナスモンに駆け寄り声を掛ける。
「デジモンは、進化する事で一定の体術等のデータがインストールされる。
　だから、基本的に努力し、体術を学ぶ事をしない…。
　馬鹿だよね、どんなに強力なデジモンに進化したからってそれに合わせた体術はどこかしらにある。
　この世に絶対無敗の必ず勝てる体術は存在しない。」
「ふっ…お嫌いじゃないわよ、そういう泥臭い強さ。」

「私達は、見下され、虐げられる存在。
　そいつらを黙らせるなら、そいつらがやらない手札は幾らでも切るわ。」
　光が、ラブリーエンジェモンを真っ直ぐ見つめる。
「そう…見下されるものは全てを奪われる。
　自由も、尊厳も、誇りも…、なのに気に入らないわね。」
「？」
「あなた、か弱い人間の癖に見下され虐げられるだけの存在なのに、持っている。」
　ラブリーエンジェモンは憎悪の感情を籠めて光を見返す。

28

「私の任務はあくまで、コンセクレイションリングの生成、あなた達の生死は、さして興味がなかけど、気が変わった。
　…ここで殺すっ！」
　ラブリーエンジェモンの声と共に天の雲が割れ、天使の軍団、そして巨大な2匹の龍が降り立つ。
　それは、天使達にとっても虎の子である、ゴッドドラモンとホーリードラモンであった。
「…四大竜の残りの２匹…!!!」
「ふぅ…。」
　光が大きく溜息を吐く。
（やっぱり…ヴォ―ボモン逃がして正解だったわね。）



少し時を遡り、ムゲンマウンテン麓。

「いやあああああああああああああああ!!!!!!!!誰かあああああああああああああ!!!!!!！」

ヴォ―ボモンは、数匹のマンティコアモンに追いかけまわされていた。

22

　マンティコアモンの爪がヴォ―ボモンに伸びる瞬間、
　正面からマンティコアモンを吹き飛ばす影があった。
　「ヴォ―ボモン？ヴォ―ボモンだよね!!!覚えてる!?」
「はっえっ？えっ!!!???」
「大丈夫???」
「久々だなヴォ―ボモン。」
　そこには、ソドムで別れた叶とブイモン、そして見知らぬ少女とよく知っているデジモンがいた。